



[原著]

大学院助産師教育における継続事例実習の学びの様相 2段階のインタビューによるデータ分析

沼澤広子、森越美香、鈴木由美

国際医療福祉大学大学院

要旨

大学院での継続事例実習における学びの様相を明らかにし、助産師教育への一助とすることを目的に、大学院助産師学生8名を対象に、研究Ⅰではフォーカスグループインタビュー（以下FGI）を行い、研究Ⅱでは個別インタビューを実施し、質的帰納的分析を行った。

その結果、大学院における助産師学生の学びの様相は、研究Ⅰでは、【受け持ちを開始してからの使命感の芽生え】【期待通りにいかない助産診断の未熟さ】【対象の期待を裏切りたくないという信念】【継続さんに寄り添えたという学びの実感】【対象の肯定的な変化によるモチベーションの亢進】【継続事例だからスムーズであったと改めて想起した学び】の6つのカテゴリーから構成された。

研究Ⅱでは、【関係構築までの人的距離のさじ加減】【基盤となる信頼関係構築の実感】【対象の反応で高まる自尊感情】【特別な存在同士での満足感の共有】【継続事例支援から得た助産ケアへの示唆】の5つのカテゴリーから構成されていた。

これらのカテゴリーから、対象との関係構築、アイデンティティ形成の強化、および今後の助産ケアの示唆という3つの様相が見出された。

大学院教育は、実習を契機に2年間の学びを通して助産師としてのアイデンティティ形成に有効であったと考えられる。しかし、出産後は乳児健診の同行のみで育児支援の機会が少なく、今後は育児支援の機会を増やすことがカリキュラム上の課題となる。

キーワード：継続事例実習、アイデンティティ形成、大学院教育、助産師学生

1. 序論

国際助産師連盟（International Confederation of Midwives: 以下ICM）は2010年に助産師教育の世界基準で「看護の基礎教育修了者/医療従事者に関する教育課程の最短期間は18か月間」とした（1）。また同年、2010年の厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会第一次報告」では、「今後より強化され

るべき助産師の役割と機能」の一つに、「妊娠期から育児期までの継続したケア」があげられている（2）。助産学実習において妊娠中期から産後1か月までに継続して受け持つ継続事例実習に関して、保健師助産師看護師法の学校養成所指定規則（以下指定規則）において「実習期間中に妊娠中期から産後1か月までに継続して受け持つ実習を1例以上行う」と明記されている

沼澤広子

〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1
国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究所
保健医療学専攻助産学分野
e-mail: numasawa@iuhw.ac.jp

2022年 3月 4日受付
2022年 11月 10日受理

(3)。継続事例実習について言及すれば、唐沢らは、助産師学校養成所の教員の9割が必要であると述べている(4)。しかし、教育課程が複数あり、修業年限も異なることから継続事例の受け持ち方も含めて、学修効果に差異が生じていると推察される。

教育年限に焦点化していえば、渡邊らは、大学の4年生統合カリキュラムにおいては、短大専攻科や専門学校と比較し最も少ないと述べ、助産師教育に充てる時間の多少が学習到達度に影響を与えていることを指摘している(5)。高田らの1年課程専攻科修了生対象の調査では、助産師教育への要望は「教育期間の延長」「多くの課程が混在した教育の現状の整備」などが報告されている(6)。これらのことから、助産師教育には十分な教育年限をとる必要があり、ICMが提唱している最短期間としての18か月を支持することとなる。

継続事例実習に言及すれば、森兼らは、継続したかかわりの中で信頼関係を築きあげ、妊娠・出産・分娩という継続的な一連の流れを学ぶだけでなく、学生自身の学習のモチベーションを高め、学生の成長に大きな意味があると報告している(7)。北村らは、「専門的知識と技術、妊婦にとって必要な内容を厳選する力、妊婦の反応に応じて指導内容・指導方法を変更する力、妊婦に満足感を与える保健指導」などを助産師学生の課題としてあげている(8)。藤原らは、継続事例実習における妊娠期からの継続的な関わりの中で、学生は対象者と人間関係を構築し、対象者の生活や性格に応じた保健指導の重要性と更なる知識の習得の必要性を学んでいたと報告している(9)。篠原らによれば、妊娠期からの体づくりの支援から始まり、妊産婦の主体性を支え、その人らしい分娩にむけた援助、家族への支援や仲間づくりが助産師の役割として認識し、助産師としてのアイデンティティの形成に重要な役割を果たしていたと述べている(10)。これらのことから、継続事例実習は助産師学生にとって保健指導能力や助産診断能力のための学修効果が高いことが窺える。また、妊娠期から対象

と家族と関わり、個別性やニーズに見合った保健指導を行うなど、助産師として寄り添うケアが重要であることが示唆される。総じて、寄り添うことにより、助産師としてのアイデンティティ形成に寄与していると考えられる。

しかし、助産師教育におけるアイデンティティ形成において、先行研究では、分娩介助経験の影響が強いこと(11、12)や、助産所実習の学びの影響(13)が報告されている。また、継続事例実習からの学びに限定すると、1年課程の助産師学校、専攻科などにおける報告は見られるものの、大学院での助産師養成における報告はない。大学院での助産師教育が推奨されるようになって10年以上が経過しているが、大学院での助産学実習、特にアイデンティティ形成を促進すると期待される継続事例実習についての報告が見当たらない。また学習効果や教育の在り方における量的調査は見られるものの、質的に調査されたものでは、福丸らの助産師学生に受け持たれた継続事例側の報告にとどまっており、受け持つ学生側からの学びについての報告が見当たらない(14)。

これらのことから、大学院助産師学生の継続事例実習における学びの様相を記述することで、大学院助産師教育におけるアイデンティティ形成への重要な資料となることが期待される。

そこで今回、大学院助産師教育における助産師学生の学びの様相を記述することを目的に、FGIと個別インタビューの2段階のインタビューを行った。

II. 研究方法

本研究は次の2段階の方法をとった。本研究目的は、学びの様相を記述することである。

第一段階として研究Iでは、グループダイナミックスによる豊富なデータが導出されることを目的としてFGIを行った。また第二段階の研究IIにおいては、FGIでは表出できなかった詳細なデータを抽出すること、および個人が継続事例と信頼関係を構築するためのプロセス性を見出すため

に、修正版グランデッドセオリーアプローチ（以下M-GTA）を用いた。考察は研究Ⅰ、Ⅱを合わせて総合考察とした。

用語の定義：

継続事例：助産師学生が、妊娠期・分娩期・産褥期・育児期まで受け持つ対象。継続事例実習中の学生からみた「継続さん」。

学びの様相：学び、学習の成果およびその在りよう、学びのさま。

継続事例実習：A大学大学院においては妊娠中期以降より受け持ち、分娩期、産褥期、育児期（最長1年まで）の継続事例実習を行っている助産学実習のことをいう。分娩介助実習11単位のうち、1単位が継続事例実習である。

A大学大学院の継続事例実習の概要：

継続事例実習は、1年次の臨地実習10単位(450時間)と並行して実施され、1単位(45時間)で、1例の事例を妊娠期から産後1年(乳児健診時)まで受け持っている。医療施設で平均5～8回の妊婦健診での保健指導を実施し、分娩介助後は、産後の1か月健診に同行する。さらに、市町村で行われる乳幼児4か月健診に同行し、2年次の7～8月頃の10か月健診同行で実習終了となる。

1) 研究デザイン

研究Ⅰ、Ⅱの研究デザインは質的記述的研究である。

2) 研究参加者のリクルート

研究参加者は、A大学大学院助産師資格取得コースで継続事例実習を経験した大学院修士2年次の院生である。実習終了後の2014年に、当時の院生8名全員に研究の趣旨を説明し、研究参加者を募集した。その際、研究参加の有無が他科目の成績評価や就職後の評価に影響しないことを伝え、8名全員が同意し参加した。研究参加者たちの実習施設は複数で、実習指導教員もそれぞれに配置されていた。本研究では、1名の実習担当教員が研究の説明、およびFGIのファシリテーターを担当した。研究参加者らの継続事例については、拒否、または途中で辞退、および関係調整を必要としたケースがなかったため、8名全員の

データを使用した。

本研究の対象は、助産師学生で大学院修士2年生というほぼ同質の集団であるため、第1研究では、グループダイナミクスを利用して、効率的に豊富な情報を入手することができるFGIを用いた。発言の機会を多くするため、4名ずつ、2グループに分け、候補日を2日もうけ、配属した実習施設が偏らないよう調整してグループ編成をした。インタビュー時は同じインタビューガイドを用い、ファシリテーターが特定の対象の発言内容、回数に偏らないように努めた。

3) 調査期間

調査期間は、継続事例実習が終了した修士2年次の2014年11月～12月である。

1. 研究Ⅰ

(1) データ収集方法

FGIの内容は、継続事例実習での体験、妊娠期から継続して受け持つことで助産師学生の継続事例との関係構築、助産師学生の支援に対する継続事例の反応、助産師学生の継続事例に対する意識の変化、大学院における助産師教育についての所感であった。語りは研究参加者の同意を得て録音し、逐語録を作成し、テキストデータとした。

(2) 分析方法

研究デザインは質的記述的研究で、質的帰納的に分析した。研究参加者の語りを一義一文になるように切片化し、意味内容の類似性に基づいてコード化し、カテゴリー化した。分析においては質的研究に熟達した研究者のスーパーバイズを受けた。

2. 研究Ⅱ

(1) データ収集方法

本研究の対象は、助産師学生であり大学院の2年生というほぼ同質の集団であった。そのため、FGIを行った後に、FGIの中では語られなかった内容やFGIでの発言の詳細を抽出するために、個別にインタビューを行った。インタビュー内容は、継続事例実習での体験、妊娠期から継続して受け持つことで助産師学生の継続事例との関係構築、助産師学生の支援に対する継続事例の反応、助産師学生の継続事例に対す

表 1 研究参加者の概要

研究参加者	年齢	臨床経験(年数)	婚姻出産 経験	インタビュー グループ	個別インタビュー 時間
研究参加者 A	24歳	NICU (1年)	無	1	104分
研究参加者 B	24歳	NICU (1年)	無	1	62分
研究参加者 C	23歳	無	無	1	73分
研究参加者 D	23歳	無	無	1	88分
研究参加者 E	23歳	無	無	2	40分
研究参加者 F	25歳	婦人科(2年)	無	2	130分
研究参加者 G	23歳	無	無	2	64分
研究参加者 H	23歳	無	無	2	70分
平均	23.5歳				79分

る意識の変化、大学院における助産師教育についての所感であった。語りは同意を得て録音し、逐語録を作成し、テキストデータとした。

(2) 分析方法

分析は木下 (15) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach: 以下 M-GTA) を用いて質的帰納的分析を行った。

本研究で用いた M-GTA は、データに密着した文脈単位の分析を行い、領域密着型の理論を生成することを目的としており、象徴的相互作用論を基盤としている。M-GTA では分析テーマを決め、分析焦点者を設定する。ここでの分析テーマは「大学院助産師教育における助産師学生の継続事例実習の学びの様相」であり、分析焦点者は「大学院の助産師学生」である。

3. 倫理的配慮

本研究 I、II は、国際医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号: 20-I-34)。

本研究では、データ管理や研究参加者らへの研究参加に関する依頼書・説明書を作成し、研究目的と意義、研究参加への自由意思と拒否権の保証、個人情報の保護について口頭で説明し、同意後でも研究への参加を中止できることを文章で保証し、十分に説明したうえで同意を得た。また、研究参加者が助産学生であるため、調査は講義・実習が終了し、成績評価提出後に行われ、本研究が研究参加者の能力を評価しないこと、その後の学業成績及び就職先での勤務評価には影響しないことについても、口頭、文書で説明し、同意を得た。

得られたデータは本研究目的のみに使用

し、録音データ、逐語録などの個人情報保護及び暗号化、守秘義務など厳重に取り扱い、研究終了後のデータ破棄、研究結果の公表予定などを明記し、文書と口頭で伝え、研究協力への同意を得た。

III. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は A 大学大学院修士 2 年生の 8 名全員で、辞退者はいなかった。このうち 3 名は臨床経験者で、経験した診療科は、NICU (Neonatal Intensive Care Unit: 新生児集中治療室) 2 名、婦人科 1 名であった。FGI の時間は第 1 グループ 73 分、第 2 グループ 55 分で、平均 64 分であった。研究参加者の個人属性については表 1 に示す。

2. 研究 I の結果

本研究における目的、助産師学生の学びに関する語り、コードのグループをカテゴリーとし、カテゴリーの類似性に基づきグループ化した。その結果、大学院の助産師学生における継続事例実習の学びの様相は 19 のコード、6 つのカテゴリーで構成され、これらを 3 つの様相で分類した。コード欄 () 内の数字は一文脈を要約して同類とみなしたコード数であり、具体的語りの引用を参加者記号 A~H と共に記載した。これらを表 2 に示す。

またこれらのカテゴリー、コードの関連図は図 1 の通りであった。以下、カテゴリーは【ゴシック】、コードを〈ゴシック〉で記す。

大学院における助産師学生の学びの様相は【受け持ちを開始してからの使命感の芽生え】【期待通りにいかない助産診断の未熟さ】【対象の期待を裏切りたくないという信念】【継続さんに寄り添えたという学びの実感】【対象の肯定的な変化によるモチベーションの亢進】【継続事例だからスムーズであったと改めて想起した学び】の 6 つのカテゴリーで構成された。

【受け持ちを開始してからの使命感の芽生え】は〈社会的ハイリスク症例である若い妊婦への気構え〉〈その人の個性性とニ

表2 大学院助産師学生における具体的な語りの例

カテゴリー・グループ名	コード (コード数)	具体的な語りの例	研究参加者
受け持ちを開始してからの使命感の芽生え	社会的ハイリスク症例である若い妊婦への気構え(3)	未婚で、パートナーは不明ですっていう方で、お母さんが、実母が積極的にサポートしているという方でした。妊娠中は、もう、若いから、格好もすごい若くて、	F
	その人の個性性とニーズを捉えた保健指導(11)	今まで働いていた時間、家で過ごす時間が増えるので、その時間をどうやって使ったらいいのかなっていうのと、運動の仕方とか、身体作りについてのパンフレット渡したのと	E
	皆でチカラを合わせていいお産になればという想い(9)	分娩中はどうなるのかとか、どうやって過ごすとか、ご主人も立ち会い希望だったので、いっしょにどうやって過ごして、乗り越えていけばいいとか、	G
期待通りにいかない助産診断の未熟さ	直面する行動変容を促す難しさ(10)	喫煙も1日8本とか、結構、妊婦としてみたときに、多くないか?っていう本数で、最終的には4本、まで減らせたんですけど、そのケアというか支援が、効果的だったのかどうかっていうのはまた自分の課題なんで	A
	継続事例との信頼関係を巡る期待とズレ(3)	相談なしに病棟に電話して、来院だったんで。だから私、来院理由とかは、病棟の人から「ね、来たんだけど」みたいな感じで教えてもらって行ったんですよ。それがすごいショックで	C
	自分の助産診断では予測できなかった怖い体験(3)	「母体音がとれてるからじゃあちょっとずらしてきて」って言われて(中略)上がってこないですよ、正常の数値まで。70とか80とかゆっくりウヨウヨしているから、これやばいと思って、	A
対象の期待を裏切りたくないという信念	支援者として認められている実感(3)	学生であるっていうことよりも、その、自分の支援者として見てくれたから、そこは気負いなくできましたね、私は。	A
	信頼されていると感じた瞬間(4)	ベクセンでカイザーになっちゃって決まったときにはもう、けっこう、なんていうんですか、いろいろ彼女も、私に相談してくれる部分もあったし、なんか、そういう信用してもらってたのかなっていうふうに思うと	F
	思い入れが特に違う継続事例(5)	ちゃんとしなきゃ、ちゃんと取らなきゃって、ま、それはもちろん、継続さんだけじゃなくて、みんなにそうあるべきだとは思んですけど、やっぱり思い入れが違いますよね	D
継続さんに寄り添えたという学びの実感	継続さんと学べた疑似体験の共有(16)	初産婦さんの話を聞くと、あ〜こういう関わり…なんかいっしょに学んでいく感じじゃないですか?	H
	継続さんと共に試行錯誤した経験(5)	バランスボールと一緒に乗ってみたりとか、あと、階段昇降とかやってみたりとかしてみんですけど、なかなかこう進まなくて	B
	継続さんから興味を持たれていると感じて嬉しかった経験(8)	自分自身にも興味を持ってってくれるのがわかったし。やっぱり、ほんと、信頼してくれているのかなっていうのを感じられたのが、もう、いちばんお産中のうれしかったことです。	B
	経過を把握できているからこそその予測のしやすさ(11)	予測とかも、継続さんに関しては、身体づくりを責任をもって今までしてきた分、予測もしやすかったし。	A
対象の肯定的な変化によるモチベーションの亢進	継続さんが主体的になれるための言葉かけ(4)	こっちから、男の子ですよ、女の子ですよ、っていう声かけはせずに、自分の目で確認してもらったほうがいいかな、と思ってそういう関わりをしたんですけど。	D
	夫婦で出産できたことへの安堵感(5)	(夫が) お水をくれたり、汗をふいてくれたりしてくれたのがすごいよかった、で、2人で赤ちゃんを迎えられたっていう気持ちがすごいあったみたいで、よかったなって	E
	育児で変わる母親像・父親像の驚きの変化(17)	今は夜の仕事を辞めて除染の仕事をするくらいしっかり“お父さん”に変身しててびっくり!みたいな感じだったから。	C
継続事例だからスムーズであったと改めて想起した学び	命の宿りからお産までの連続性の実感(11)	継続さんの結婚式の時の写真とかを見せてもらったり(中略)K君が生まれるまでの一部始終を聞いて「おー!」みたいな感じで、いちばん最後に会ったのは10ヶ月健診の時です。	B
	継続して関わっていない産婦に声をかける難しさ(16)	(産婦に) 痛い中で、なんか、「はじめまして、学生のNです」っていうのも、なんかなああっていつも思ってた	G
	自然と場の空気が読めた継続事例との関係性(4)	その場に自分がいるときに、ちょっと旦那さんにも配慮しようとか、ちょっと二人の時間をつくろうとか、そういうところに配慮できるので	E

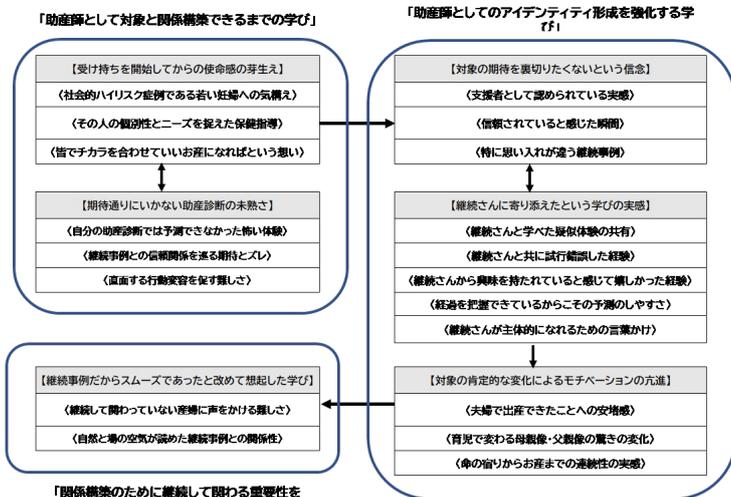


図1 大学院における助産師学生の学びの様相

ズを捉えた保健指導〉〈皆でチカラを合わせていいお産になればという想い〉というコードから構成されていた。助産師学生は継続事例を紹介され、受け持ち開始と共に、身体的な経過は良好であっても社会的にはハイリスクな症例との出会いや、以前から続けていた不適切な生活習慣などの問題に対して、妊娠経過が正常から逸脱しないように保健指導を計画し、家族と一緒に「よいお産」を迎えるために尽力していた。しかし、助産師学生の予測が外れ、順調に経過しない事例に対し〈自分

医学と生物学 (Medicine and Biology)

表3 大学院助産師学生における継続事例を通じた学びの様相 カテゴリーと概念、定義

カテゴリー	概念	定義	ヴァリエーションの例	研究参加者
関係構築までの人的距離のさじ加減	継続事例との関係構築への不安と緊張	事前情報や継続事例の反応から関係性を築けるかどうかという不安と緊張の念をもつ	「まずは、しゃべる前の第一印象？見た目から見て、すごい子だなって思ったんですね。金髪に、服装もすごい薄着で、いまだきの子っていう感じで」	F
	学生だから付度する距離感	継続事例は他の事例とは違うのは分かるが学生として付度するような関わりで距離感がある	「話すぎす遠すぎず、大人な距離を保つけど、けてそれが、うん、心が触れ合っていないわけでもなく(中略)カメの言葉ではしゃべれないし、かといってよそよそしくもできないし、っていう意味での距離感だったのかな」	D
	信頼を裏切りたくない気持ち	継続事例にたいして細心の注意を払うのは信頼を裏切らないため	「言いたくなくて、期待させたくなくて、本当に(鬼魂出が)もうすぐになるまで、言うのはやめようと思って、(中略)ほんとに何か『頭がもうすぐ出ようってぐらいになったら、言いますね』って言って」	G
基盤となる信頼関係構築の実感	継続した関わりだからこそ相互理解	継続して関わってきたからこそ、相互に理解しあえていると感じること	「継続してきているというのは、ほんとに大事だし、なんか信頼関係とかほんとに大事だっていうのを、すごい実習で思いました。お互い理解しているっていうのは大事だなって思うし(中略)私は結構なんでも話せたり、向こうもわかってくれた、くれているじゃないかなと思うんですけど」	E
	信頼されているという実感	対象とその家族から気遣われ、感謝、相談してくれて信頼されていると実感すること	「やっぱりそれなりの根拠があってやっているからっていうのがあって、『信頼してくれているんだな』っていうのもその時にはわかりましたし、うん、やっぱりその、自分自身に目を向けてくれているっていうのが、そこでわかったのがすごく嬉しかったし、なんかこう、自分が継続事例を持させてもらった意味を、いちばん理解できたかな」	B
対象の反応で高まる自尊感情	あの関わりで良かったのかという戸惑い	対象への関わりが十分できていたかどうか戸惑いがあること	「痛みもあるんで、何かそんなに話したくないのかな、みたいなことをちょっと思ったんですね。(中略)うるさくならないように話しかけたりとか、ちょっと隙をついて話せる時があったらとか、話せたらよかったのかなって思って。」	G
	対象の反応で高まる自己評価	自分が指導したことによる対象の肯定的な反応の変化や行動変容で自己評価が高まること	「『母乳っていいでしょ？』って、『免疫とか入ってて』って、『だから、いいって聞いたら、M(自分のこと)は全部母乳であげる』って、『だって、この子が元気な方がいいもん』って話して」	F
	結果良ければすべてよし	対象のために努力して大変だったこともよい結果がうまるとすべてが良く感じられてしまうこと	「大変だったこと、辛かったことはもう忘れちゃいました。何か、その時その時が必死すぎて、きっと辛かったこともあったかもわからないけど、何かもう、結果オーライで、何か全部、何だかんだよかったですって(笑)」	C
特別な存在同士で満足感を共有	寄り添うことで安心感・満足感を提供	対象に個別的に寄り添うことで安心感や満足感を提供したいと思う	「陣痛がきて病院に来た時に、何かその『見慣れた顔だから安心した』みたいな感じだったって言うてもらったときとかに、(中略)継続していることから、安心してもらえたんだっていうのは、すごく感じました。」	H
	家族も巻き込んで共に学ぶ特別感	継続事例の家族を巻き込んで一緒に学ばせてもらう特別感	「自分がどうしたらいいかわからないし、ああ、それで、奥さんの苦しんでいる姿を見るのが辛いっていうことで、『立ち会いもどうしようかな』って(中略)『ここはこういうふうに関わればいいんですよ』みたいなパンフレットを作りました。」	D
	大事な瞬間への立ち会い	出産という大事な瞬間に立ち会えたこと	「行くたび言われるんですね。だから、出産がスタートで…とか話したと思うんですけど、何かそれはききといつまでたっても、そのやっぱり出産っていうのも、大事な瞬間なんだっていうのが」	C
継続事例支援から得た助産ケアへの示唆	個別的支援の重要性	個別性を尊重し、考慮しながら支援する重要性を知る	「赤ちゃんとか女性個々で違うと思うので、テキストでこう書いてあっても、必ずしもその女性と赤ちゃんにあてはまるかって言われたら、そうではないですし…って言う意味で、個別的支援って、重要だなって思います。」	D
	経過をきちんと見る重要性	継続事例実習以外の対象との学びを比較すると経過をきちんと見る重要性がわかる	「Kちゃんの場合は、こんな小っちゃいときから見ていたから、なんかちょっと違うんですよ、自分の思い入れも違うし、違うんですね。(中略)なんか具体化したものが出てきたっていうのが、その実感がすごくあったんですね。」	B
	医療者が伝えられないような生活者の目線	医療者が伝えられないような日常的な知識を伝えること	「あと自分が感じているのは、医療者のあまり言わないこと、(中略)裏情報じゃないですけど、なんかそういうプラスアルファって表現するんですけど、プラスアルファな部分を言っておけると、(けっこう効果的だったのかな)って思ってます。」	B

の助産診断では予測できなかった怖い体験〈継続事例との信頼関係を巡る期待とズレ〉という反省や教訓の気持ちから〈直面する行動変容を促す難しさ〉を認識し、【期待通りにいかない助産診断の未熟さ】というケアや保健指導の難しさを体験した。ここまでは「助産師として対象と関係構築できるまでの学び」の様相である。

やがて妊婦健診を通して〈支援者として認められている実感〉〈信頼されていると感じた瞬間〉〈思い入れが特に違う継続事例〉という学びがあり、これらは【対象の期待を裏切りたくないという信念】となる。

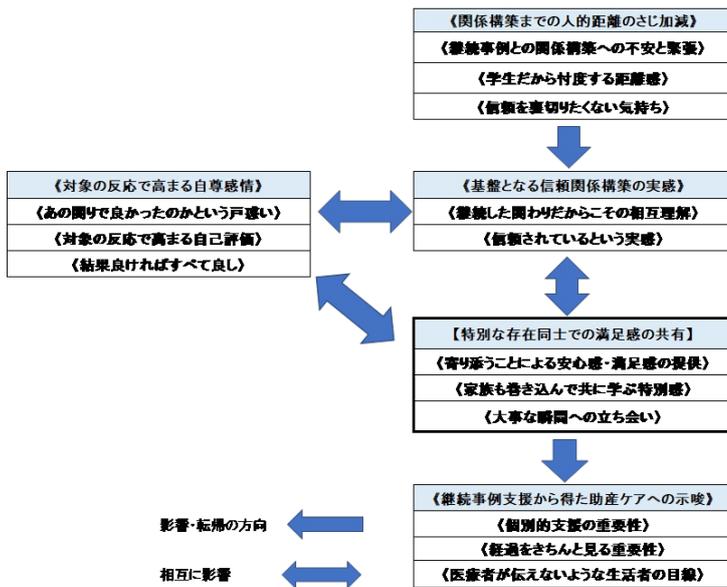
〈継続さんと学べた疑似体験の共有〉〈継続さんと共に試行錯誤した経験〉により、分娩が近づくにつれ継続事例や家族が学生に関心を向けてくれるなど〈継続さんから興味を持たれていると感じて嬉しかった経験〉をしていた。また、分娩の場面においては、〈経過を把握できているからこそその予測のしやすさ〉を認識し、〈継続さんが主体的になれるための言葉かけ〉など、【

継続さんに寄り添えたという学びの実感】ができていた。そして〈夫婦で出産できたことへの安堵感〉〈育児で変わる母親像・父親像の驚きの変化〉〈命の宿りからお産までの連続性の実感〉から【対象の肯定的な変化によるモチベーションの亢進】を認識する。ここまでが「助産師としてのアイデンティティ形成を強化する学び」の様相となる。

また、継続事例ではない産婦への援助を通して、〈継続して関わっていない産婦に声をかける難しさ〉があることに改めて気づき、継続事例の場合は〈自然に場の空気が読めた継続事例との関係性〉があり、これらは【継続事例だからスムーズであったと改めて想起した学び】であったと感じる。これらは「関係構築のために継続して関わる重要性を再認識した知」という学びの様相であった。

3. 研究Ⅱの結果

個別インタビュー時間の最長は130分、最短は40分、平均時間は79分であった。分析テーマ「大学院助産師教育における助



※【 】はコアカテゴリ、() はカテゴリ、〈 〉は概念を示す

図2 大学院助産師学生における継続事例を通じた学びの機相

産師学生の継続事例実習の学びの様相」は【関係構築までの人的距離のさじ加減】【基盤となる信頼関係構築の実感】【対象の反応で高まる自尊感情】【特別な存在同士で満足感を共有】【継続事例支援から得た助産ケアへの示唆】の5つのカテゴリと14の概念から構成されていた。これらのカテゴリ、概念、定義、ヴァリエーションの例を表3に示す。

1. ストーリーライン (図2)

以下ストーリーラインにおいて、カテゴリは【 】、概念は〈 〉で示して説明する。

助産師学生は継続事例を紹介されると、果たしてうまく関係性が築けるかどうか〈継続事例との関係構築への不安と緊張〉の念を抱く。〈学生だから忖度する距離感〉をとりつつも、妊婦健診の回数を重ね、関係性ができると〈信頼を裏切りたくない気持ち〉を抱く。ここまでは【関係性を築くまでの人的距離のさじ加減】である。

やがて〈継続した関わりだからこそその相互理解〉や健診に同伴している家族からも〈信頼されているという実感〉をもつようになり、【基盤となる信頼関係構築の実感】をおぼえる。時には〈あの関わりで良かったのかという戸惑い〉を持つが、継続事

例に変化がみられると、〈対象の反応で高まる自己評価〉により、〈結果良ければすべてよし〉となり、継続事例への保健指導においては【対象の反応で高まる自尊感情】が得られていた。

そして分娩が近づくころには〈寄り添うことで安心感・満足感を提供したい〉という想いを抱き、〈家族も巻き込んで共に学ぶ特別感〉とともに、分娩時は〈大事な瞬間への立ち会い〉をする。これらが【特別な存在同士での満足感の共有】を促し、信頼を築きその後の関係性を継続することにつながるため、本研究におけるコアカテゴリとした。

やがて一連の継続事例実習を通して〈個別的支援の重要性〉〈経過をきちんと見る重要性〉などの学びに加え、〈医療者が伝えられないような生活者の目線〉

など継続事例以外の妊産婦にも支援したい助産ケアとなる。これらが【継続事例支援から得た助産ケアへの示唆】となる。これらを図式化すると図2の通りであった。

2. 概念とカテゴリ

以下、それぞれのカテゴリ【 】、概念〈 〉および定義、語りの例について表3に引用した。

【関係構築までの人的距離のさじ加減】は〈継続事例との関係構築への不安と緊張〉〈学生だから忖度する距離感〉〈信頼を裏切りたくない気持ち〉の3つの概念から構成された。〈継続事例との関係構築への不安と緊張〉の定義は「事前情報や継続事例の反応から関係性を築けるかどうかという不安と緊張の念をもつ」である。初対面の時に関係を築けるかどうか不安の念をもったという研究参加者Fのヴァリエーションの例を引用した。〈学生だから忖度する距離感〉の定義は「継続事例は他の事例とは違うのは分かるが学生として忖度するような関わりで距離感がある」である。継続事例との距離間は学生としてちょうどよいと解釈していた研究参加者Dのヴァリエーションの例を引用した。〈信頼を裏切りたくない気持ち〉の定義は「継続事例にたいして

細心の注意を払うのは信頼を裏切らないため」である。分娩中に産婦に過度な期待をさせないよう言動に注意していた研究参加者Gのヴァリエーションの例を引用した。

【基盤となる信頼関係構築の実感】は〈継続した関わりだからこそその相互理解〉〈信頼されているという実感〉の2つの概念から構成された。〈継続した関わりだからこそその相互理解〉の定義は「継続して関わってきたからこそ、相互に理解しあっていると感ずること」である。妊娠期から継続して関わったため相互理解できたのではないかと語る研究参加者Eのヴァリエーションの例を引用した。〈信頼されているという実感〉の定義は「対象とその家族から気遣われ、感謝、相談してくれて信頼されていると実感すること」である。自分が信頼されていると感じた場面について語る研究参加者Bのヴァリエーションの例を引用した。

【対象の反応で高まる自尊感情】は、〈あの関わりで良かったのかという戸惑い〉〈対象の反応で高まる自己評価〉〈結果良ければすべて良し〉の3つの概念から構成された。〈あの関わりで良かったのかという戸惑い〉の定義は「対象への関わりが十分できていたかどうか戸惑いがあること」である。産婦への声掛けの仕方に疑問が残る研究参加者Gのヴァリエーションの例を引用した。〈対象の反応で高まる自己評価〉の定義は「自分が指導したことによる対象の肯定的な反応の変化や行動変容で自己評価が高まること」である。指導により対象の母乳育児の意識が変わったという研究参加者Fのヴァリエーションの例を引用した。〈結果良ければすべて良し〉の定義は「対象のために努力して大変だったこともよい結果がうまれるとすべてが良く感じられてしまうこと」である。対象に必死に関わり、結果が良ければすべて良かったと語る研究参加者Cのヴァリエーションの例を引用した。

【特別な存在同士での満足感の共有】は、〈寄り添うことによる安心感・満足感の提供〉〈家族も巻き込んで共に学ぶ特別感〉〈大事な瞬間への立ち会い〉の3つの概念か

ら構成された。〈寄り添うことによる安心感・満足感の提供〉の定義は「対象に個別に寄り添うことで安心感や満足感を提供したいと思う」である。妊娠中から産婦に関わっているから安心してもらえるという研究参加者Hのヴァリエーションの例を引用した。〈家族も巻き込んで共に学ぶ特別感〉の定義は「継続事例の家族を巻き込んで一緒に学ばせてもらう特別感」である。引っ込み思案な夫を巻き込んで立ち会い分娩の指導をしたという研究参加者Dのヴァリエーションの例を引用した。〈大事な瞬間への立ち会い〉の定義は「出産という大事な瞬間に立ち会えたこと」である。時間が経過しても出産は大事な瞬間であったという研究参加者Cのヴァリエーションの例を引用した。

【継続事例支援から得た助産ケアへの示唆】は〈個別的支援の重要性〉〈経過をきちんと見る重要性〉〈医療者が伝ええないような生活者の目線〉の3つの概念から構成された。

〈個別的支援の重要性〉の定義は「個別性を尊重し、考慮しながら支援する重要性を知る」である。必ずしも教科書通りではない個別的な関わりが重要だという研究参加者Dのヴァリエーションの例を引用した。〈経過をきちんと見る重要性〉の定義は「継続事例実習以外の対象との学びを比較すると経過をきちんと見る重要性がわかる」である。胎児から乳児まで継続して経過をみてきた重要性を実感したという研究参加者Bのヴァリエーションの例を引用した。〈医療者が伝ええないような生活者の目線〉の定義は「医療者が伝ええないような日常的な知識を伝えること」である。医療者とは違う生活者の目線で伝える必要性を語る研究参加者Bのヴァリエーションの例を引用した。

IV. 考察

本研究においては、研究I、IIの2段階を経て、大学院助産師教育における助産師学生の継続事例実習の学びの様相を抽出した。第1研究では19のコードと6つのカテゴリーから構成された。学びの様相は、

「助産師として対象と関係構築できるまでの学び」「助産師としてのアイデンティティ形成を強化する学び」に大別され、継続事例実習全体を通して振り返ると「関係構築のために継続して関わる重要性を再認識した知」も見出された。

また第Ⅱ研究では、助産師学生の継続事例実習の学びの様相は5カテゴリー、14概念から構成されていた。これらのうち、【関係構築までの人的距離のさじ加減】【基盤となる信頼関係構築の実感】は継続事例との関係性の構築までのプロセスであり、学びの様相と捉えられた。また【対象の反応で高まる自尊感情】【特別な存在同士で満足感を共有】は、継続事例との相互関係がさらに強まり、アイデンティティが強化されるプロセスであり、学びの様相であると考えられる。また【継続事例支援から得た助産ケアへの示唆】は、実習を通して継続事例だけではなく、すべての事例に行うべき助産ケアとしての学びとなっていた。

研究Ⅰと研究Ⅱにおいては、分析方法は異なるが同じ対象者であり、インタビューガイドが類似していたため、近似した結果が得られたと読みとれる。FGIではそれぞれのグループで、データの質に差がみられたが、個別インタビューで個人の詳細な語りを抽出するというFGIを補完するような位置づけとなったことが、近似した結果に繋がった可能性がある。さらに、2つのグループを併せて分析したことで、データの質をならしたと考えられる。その結果、3つの学びの様相が見出された。

ここでは、大学院助産師学生の継続事例実習からの3つの学びの様相を考察する。

1. 助産師として対象と関係構築するまで

【受け持ちを開始してからの使命感の芽生え】は継続事例の個別性を重視し、満足度が高い分娩の場を提供するという助産師学生としての態度、姿勢についての最初の学びであった。また【関係構築までの人的距離のさじ加減】により、どの程度の距離感で関わるのかに苦慮し、関係性を構築する際の基盤がその後の関係性に影響するため、重要であると考えられる。津間ら(1

6)は、対象者に寄り添うケアを「密接な人間関係に基づくケア」と報告している。

助産師学生は、継続事例のために自分の生活を調整し、個別性を捉えながら、対象が生理的経過から逸脱しないための学びを体験していると考えられる。福丸らによると、継続事例の女性側からの意識として学生に協力したい、受け持たれることでメリットがあるかもしれないと思って受け持ちを承諾したという思いを抱いていたと述べている(14)。したがって、対象が「受け持ってもらえてよかった」と実感してくれるように、保健指導などを通して対象のセルフケア能力を高められるような関わりが重要である。また受け持ち開始をして日が浅い学生は、助産技術や診断能力の習熟度が高い時点にあたるとは限らないため、【期待通りにいかない助産診断の未熟さ】に気づくことがある。タイミングをとらえた教員や指導者のフォローは、その後の助産師としてのアイデンティティ形成に影響する要因であると考えられる。

助産師学生の場合、昼夜を問わず分娩介助に入ることや、妊娠期から見学にとどまらず援助の実施があるため、学生の緊張も高まることが予測される。体力的、精神的にも負荷がかかり、拘束時間が長い助産学実習では、学生がパワーレスにならないための教育側のフォローが不可欠である。石村ら、宇山らは、教員や指導者の不適切な対応は困難感に繋がると述べ(17)(18)、永井も、実習が思うように進行しない困難や学生の心身の負荷に対する支援が必要だと述べている(19)。

助産師学生にとって、継続事例と関わるための姿勢・態度を学ぶことは、職業性アイデンティティ形成の第一段階として重要な意義があると考えられ、特に初期段階の関係性の構築においては、教員や指導者の役割が重要であると考えられる。

2. 助産師としてのアイデンティティ形成を構築する学び

やがて、継続事例との関係性が構築されると、学生の士気が上がり、【対象の期待を裏切りたくないという信念】を抱くようになり、【対象の肯定的な変化によるモチ

ベーションの亢進】を認識し、対象に寄り添えるようになると、【継続さんに寄り添えたという学びの実感】および【対象の反応で高まる自尊感情】に現れるような、相手の肯定的な変化が自身の喜びとなるような意識に変化する様相が窺えた。

このような姿勢について Shohani M. らは看護における基本的な概念の1つであり、環境や他の人々との相互作用の結果がプロフェッショナルリズムであると述べている(20)。本研究において、助産師としてのプロフェッショナルリズムに言及すれば、この段階はアイデンティティが強化される段階と考えられる。中島らは助産師学生の職業的アイデンティティ形成に関して、自己効力感との関連(21)を、永橋らは自尊感情との関連を指摘している(22)。このため、本研究においても継続事例へのケアを通して、自尊感情や自己効力感が高まることで、アイデンティティが強化されたと考えられる。永橋らは分娩介助実習の到達度が高い学生は、職業的アイデンティティも高いと報告している(22)。継続事例実習は、分娩介助実習を含む実習であり、職業的アイデンティティの強化には重要な位置づけとなると捉えられる。

さらに、家族も巻き込んで信頼関係を構築した段階に至ると、学生は【基盤となる信頼関係構築の実感】を得ることができ、その後も生まれた子どもに継続して関わり、成長を追うなどの体験を通して学生なりに自信がつく様相が明らかとなった。そして分娩をクライマックスとして、【特別な存在同士での満足感の共有】する体験を得ることで、助産師としてのアイデンティティ形成につながると考えられた。高島らも、学生が受け持ち対象との継続的でダイナミックな関係性を通して、獲得した学びの達成感や充実感、助産師本来の業務のあり方の体験となり、次の学習や助産師という職業への新たな動機づけとなっていると報告している(23)。このため一人の事例に継続的に関わる継続事例実習は、助産師としての役割や期待されるニーズを学び、職業選択の動機づけ即ち職業的アイデンテ

ィティを培う重要な意義があると考えられる。
3. 助産師としてのアイデンティティ形成及び助産ケアへの示唆

「関係構築のために継続して関わる重要性を再認識した知」は、他の症例と関わっていたからこそスムーズであったと振り返る場面であると考えられる。したがって継続事例実習を振り返ると、助産師としての対象と関係性を構築し、自身のアイデンティティを形成するためには重要な学びとなったことが窺える。これらは、日本助産師会が提言する助産師のコア・コンピテンシーのマタニティケア能力の中に記されている分娩を核とするマタニティサイクルにおいて、安全で有効な助産ケアを提供することに相当する(24)。すなわち自己の責任のもとに正常な分娩を介助し、新生児および乳幼児のケアを行うこと、その際に女性の意思や要望を反映できるように支援することである。このことから、継続事例実習の重要性が再確認される。これらの助産ケアは、継続事例実習以外のすべての対象に対しても、継続的な関係構築による円滑性などが適用されるべきことであり、それが助産師としてのアイデンティティ形成を促すために必要だと考えられる。

本研究で得られた結果を踏襲すると、2年間の大学院助産師教育においては、教育年限が長いことは量的なメリットが期待できるばかりでなく、質的な充実にも貢献していると考えられる。猿田の報告では、修士課程を修了した助産師の職業的アイデンティティは、モチベーション、専門職の在り様の追求、助産師のジレンマ、マネジメントなどの影響を受けていたという(25)。継続事例実習は大学院助産師教育の一部ではあるが、助産師としてのアイデンティティ形成に影響を与え、妊娠期から育児期までの助産ケアを通して、専門職としての在り方を追究する機会になったと考えられる。

ここまで、妊娠期からの継続事例実習が助産師としてのアイデンティティ形成に有効であることを述べてきた。しかし、育児期の助産ケアの語りが少なく、育児期にお

ける継続的な関わりについては支援の機会が限られていたと考える。妊娠期に36週以降は1週間のスパンで継続事例に関わっていたことと比較すると、4か月健診、10か月健診など乳児健診などでの関わり限定されていた。乳児健診での関わりの頻度は、妊娠期のそれに比して少ない。育児期では育児不安などに遭遇しやすいため、家庭訪問などの機会を作り、関わる頻度を増やすことが今後の課題であると考えられる。健やか親子21（第2次）の基盤課題Aに「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」が掲げられており（26）、継続した助産ケアの重要課題であると受け止め、カリキュラム上の課題となると考えられる。

結語

A大学院助産師教育における継続事例実習での学びの様相は、FGIでは6つのカテゴリー、19コードから構成され、3つの様相の学びを経ており、これらのカテゴリー、コードで「大学院助産師教育における継続事例実習の学びの様相」を説明できた。また個別インタビューでは、5つのカテゴリー、14の概念で構成されており、これらの構成概念で「大学院助産師教育における継続事例実習の学びの様相」を説明できた。大学院での助産師教育は、継続事例実習においては症例数や実習時間など量的な視点ばかりでなく、質的にも充実しており、助産師としてのアイデンティティ形成に有効であったと結論づけられる。今後は育児期での関わりの頻度を増やすことが課題となる。

研究の限界

本研究のFGIでは、グループによるデータの質に差がみられた。グルーピングの際に個人属性などを考慮する必要性があったことや、2年間を通じて学生を熟知していることが影響した可能性もある。インタビュアーが学生の発言を整理し、公平性を保つことや、テーマに忠実な語りを抽出できるようなファシリテーターとしての采配が今後の課題となる。

また、個別インタビューがFGIの内容を補完するという位置づけとならないようインタビューガイドの内容も検討する必要がある。

なお、本研究においては申告すべき利益相反はない。

引用文献

- (1) 助産師教育の世界基準(2010). 日本看護協会. <https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/basic/standard/pdf/kj-03.pdf>, (参照 2020-9-1).
- (2) 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 厚生労働省. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000013l6y.html>, (参照 2020-9-1).
- (3) 保健師助産師看護師学校養成所指定規則. 厚生労働省. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000013l6y-att/2r98520000013lbh.pdf>, (参照 2022-5-20).
- (4) 唐沢泉, 大室律子. 助産師教育を担当する教員が考える将来の助産師教育. 岐阜医療科学大学紀要. 2009, (3), p.185-193.
- (5) 渡邊典子ほか. 大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針その2 到達状況の比較および分娩介助・継続事例実習指針. 助産雑誌. 2007, 61(4), p.344-351.
- (6) 高田昌代, 藤井ひろみ, 嶋澤恭子. 助産学専攻科修了生の助産師としてのキャリアコースと教育へのニーズに関する調査. 兵庫県母性衛生学会雑誌. 2016, 25, p.51-55.
- (7) 森兼眞理, 五十嵐稔子, 脇田満里子. 助産学実習における継続事例実習の現状と課題 教育機関による実態調査を通して奈良県立医科大学医学部看護学科紀要. 2015, 11, p.14-23.
- (8) 北村万由美, 藤原弘子, 四宮美佐恵. 助産師教育における妊婦保健指導実習で

- の学生の課題 臨床指導者の自由記述評価より. 母性衛生. 2016, 56(4), .710-720. (9)藤原弘子, 曾根清美. 助産学生が受け持つ継続事例における周産期の学びの関連. インターナショナル Nursing Care Research. 2017, 16(2), p.21-29.
- (10)篠原ひとみほか. 本学の助産所実習における実習記録からみた助産師学生の学び. 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要. 2012, 20(1), p.59-67.
- (11)三谷明美, 矢田フミエ, 田中マキ子. 助産学実習におけるリフレクションが助産師学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響. 日本看護学会論文集: 看護管理・看護教育 51 回. 2021, p.187-190.
- (12)三谷明美, 矢田フミエ, 田中マキ子. 分娩介助実習における職業的アイデンティティ形成プロセスの縦断的調査研究 助産師の職業的アイデンティティ尺度を用いて. 山口県立大学学術情報. 2020,(13), p.49-53.
- (13)子安恵子ほか. 長期に渡る助産院実習における助産師学生の経験からの学び. 神戸市立看護大学紀要. 2008, 12, p.11-19.
- (14)福丸洋子, 落合亮太, 松坂充子. 継続事例実習で助産師学生に受け持たれた女性の学生実習に対する思いとその変化. 日本助産学会誌. 2010, 24(2), .322-332.
- (15)木下康仁. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌. 2007, 6(2), p.1-10.
- (16)津間文子ほか. 本学における助産師教育の現状と課題: 助産所実習の学びの分析を通して. 看護・保健科学研究誌. 2013, 13(1), p.65-73.
- (17)石村美由紀, 古田祐子, 佐藤香代. 助産実習における学生のパワーレス状態に関する研究 その要因と回復の促進. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2015, 12, p.13-23.
- (18)宇山美保. 助産師学生が分娩介助実習において困難を感じたり悩んだりしたこと. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録. 2006, 31, p.57-63.
- (19)永井紅音. 助産師学生の産褥期実習における実習目標達成の過程で生じた困難. 母性衛生. 2020, 60(4), p.625-633.
- (20)Shohani M, Zamanzadeh V. Nurses' Attitude towards Professionalization and Factors Influencing It. J Caring Sci. 2017, 6(4), p.345-357.
- (21)中島由紀子, 山内葉月. 助産学教育に関する研究 助産学生の職業的アイデンティティの実態と関連要因. 保健科学研究誌. 2014, 11, p.39-48.
- (22)永橋亜希子, 入山茂美. 助産学生の分娩期の実習到達度と職業的アイデンティティの関連. 母性衛生. 2019, 60(2), p.339-347.
- (23)高島葉子, 高塚麻由, 菊地美帆. 本学における助産師教育の現状と今後の課題(第 2 報) 助産技術の習得度に焦点をあてて. 新潟県立看護大学紀要. 2012, 1, p.36-41.
- (24)助産師のコア・コンピテンシー 2021. 日本助産師会. <https://www.midwife.or.jp/midwife/competency.html>, (参照 2022-5-1).
- (25)猿田了子. 助産師の職業的アイデンティティの形成に関する研究 修士課程で助産師教育を受けた助産師における検討. 日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要. 2020, (24), p.21-29.
- (26)健やか親子 21(第 2 次). 厚生労働省. <https://sukoyaka21.mhlw.go.jp/>, (参照 2022-5-1).

Aspects of Learning from Continuing Case Practice in Graduate Midwifery Education A data analysis of two-stage interviews

Hiroko NUMASAWA Mika MORIKOSHI Yumi SUZUKI

International University of Health and Welfare Graduate School

Summary

In order to clarify aspects of learning in continuing case practice in graduate school and to assist in midwifery education, a focus group interview (hereafter referred to as In Study II, individual interviews were conducted and qualitative inductive analysis was conducted.

As a result, the following aspects of the graduate school midwife students' learning were found in Study I: [budding sense of mission after starting to receive the patient] [immaturity in midwifery diagnosis that does not meet expectations] [belief that they do not want to fail the expectations of the subject] [realization of learning that they were able to be there for the continuing patient] [positive changes in the subject that The study consisted of six categories: [motivation increased], [learning that was smooth because it was a continuation case], and [learning that was recalled again because it was a continuation case.

Study II consisted of the following five categories: [Human distance to build a relationship], [Feeling of building a trusting relationship as a foundation], [Self-esteem increased by the subject's response], [Shared sense of satisfaction with other special people], and [Suggestions for midwifery care from the support in ongoing cases]. From these categories, three aspects were found: building a relationship with the subject, strengthening identity formation, and suggestions for future midwifery care.

Graduate education was considered effective in shaping midwifery identity through two years of study, which was triggered by practical training. However, there were few opportunities for childcare support such as health checkups after birth, and increasing opportunities for childcare support will be a curriculum issue in the future.

Keywords: continuing case practice, identity formation, graduate education, midwifery students